

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2008年3月

博士論文審査報告書

論文題目：「運用力につながる文法記述」試論
—モダリティ表現「ハズダ」の分析を通して—

申請者氏名：太田 陽子（おおた ようこ）

主 査 川口 義一（大学院日本語教育研究科教授）

副 査 蒲谷 宏（大学院日本語教育研究科教授）

副 査 佐久間 まゆみ（大学院日本語教育研究科教授）

本論文は、日本語「教育のために役立つ文法」、すなわち「教育文法」とはどのようなものかという問いから出発して、従来の日本語教科書や文法解説書等における「文型・文法」の記述が「運用力養成」の視点を欠くという問題点を指摘し、「運用力につながる文法記述」を目指すという点に研究の方向性を見出そうとするものである。具体的な考察の対象として「ハズダ」を取り上げて論じてはいるが、主眼は「コミュニケーションのための文法記述の理念と方法を探る試みの一つ」という点に置かれている論考であり、日本語教育学としての文法研究のあり方を示そうという点において、日本語教育学の博士論文として高く評価できるものである。

とりわけ、日本語教材や文法解説書における「ハズダ」の文型記述、学習者の使用例、日本語教師の訂正行動等を調査した第2章～第4章は、日本語教育学における文法研究の方法論の可能性を示すものであり、本論文の貴重な成果として評価される。また、日本語の「教育文法」が母語話者文法と別に存するものではなく、言語の4技能を支える「運用」という視点から捉え直していく「姿勢」としてあるという結論は、本研究の独創性を示すに足る重要な到達点であると言えよう。

また、第7章「文脈を重視した文法記述試論」は、理念を具現化しようという意欲的な試みとして評価できるだろう。ここでは、「文脈化」「機能」「伝達効果」という概念を用いて、ある文法形式の「基本的意味」が、話し手と聞き手のありかたや現実の状況との関わりの中で特定の伝達の価値を持つ情報として生成されていくまでの過程を実感できる、そのような文法指導の可能性が論じられており、文の文法を超えてコミュニケーションの文法が志向される新しい言語教育の方法が示唆されている点で、本論文が単なる文法研究ではなく言語の教育のための研究であることを明示している。

本論文は、全7章からなる平明簡潔な論述を展開しているのに加え、「巻末資料」として全13種の各種データを添付している点にも特徴があり、これによって、単に理念的であるに留まらぬ、実証的でより説得力に富む研究成果を提示し得ている。

ただし、「試論」として位置づけることから予想されるように、以下に述べるような、いくつかの課題も抱えており、今後、著者が授業の実践や教材開発等を通して、これらの課題を解決すべく研究を発展・深化させていくことが期待される。

第一に、日本語の「教育文法」という、現在、議論も多く、研究動向の定まらない課題を、本研究の前提として展開するには、国語学・日本語学における現代日本語研究、1970年代以前の日本語教育における実践・理論両面の文法教育研究、それ以降の文法指導論、教材・教授法研究等の諸成果を踏まえ、より総合的な研究史の記述が不可欠であろう。特に、著者自身も、「教育文法」の嚆矢として位置づける寺村秀夫氏の「教育文法」に対する評価とその後進の研究の位置づけに関しては、さらに一段の研究の深化が必要であると思われる。

第二に、第5章と第6章において、著者自身の構想する「運用力につながる文法記述のための分析」方法として「ハズダの文脈化」の記述が展開されているが、【ハズダの機能】として挙げられている、A～Fの6タイプの定義は、本論文の126頁に掲げられた【図3】「ハズダの機能と文脈全体図」との関係で見ると、日本語学習者や日本語教師にとって容易に理解しうるものとは言えない。例えば、「機能E」の説明に含まれる「不一致」と「一致」の並存や【伝達効果】として挙げられた項目の中に見出せる、通常は「機能」と呼ばれている項目の混在などが理解の混乱を呼びそうだ。これは、本論文の「文脈化」の規模が「連文」レベルの、「構文論」寄りにあいまいな規定で設定されていることによるものではないかと懸念される。今後、著者自身の授業の実践や教材作成等の体験を通して、「機能」の分類と説明に、より一層分かりやすい記述の整理と提示の方法を工夫する余地があるといえよう。

第三に、第3章の、母語話者と日本語学習者のハズダの使用調査の結果から「文章展開パターン」別のハズダの使用傾向を分析した結果と、新聞の投書文の実例との比較が、説得力に欠ける記述となっている点が指摘される。これは、文章論における「ハズダ」の「文段」の「統括機能」という分析観点を導入することにより、現時点でも容易に解決可能な課題である。また、本論文で「談話展開パターン」を調査した「会話作成タスク」の誤用分析等の結果にも、同様の課題が認められる。

以上のような課題を、今後の研究展開の可能性に満ちた側面であると考えれば、ハズダを一例とする、構文論と文章・談話論と語用論、そのすべての接点に位置する文法項目の教育について「運用力につながる文法記述」の必要性を導き出したという点において、本論文は「教育文法」としての独創性を持ち、将来の発展可能性も大いに期待される研究の成果であるといえよう。